

# ◎市民とコンベンション

## ①横濱JAZZプロムナード

■うめもと實

### 1「ジャズは好き」

「ジャズは今世紀が生んだ最大の音楽である」と言われている。そうかも知れない。アメリカは当然としても、ヨーロッパ、ロシア、あるいはアジア各地へ行ってもその名は知れ渡っているしなあ。日本なんぞ「ジャズ知ってますか」なんて百人に聞いたら「食べたコトありません」なんて答えるのは一人位のモンだろう。大抵はそれが「音楽」だってコト位知ってるからだ。

今、これを読まれてる皆さんも「ええ、知ってますとも」とお答えになるでしょうね。そうでないと話が先へ進みません。

ところで「ジャズは好きですか」となる話は別だ。「カラオケはやるんですが、ジャズは余り……。」とか「ちょっとムズカシそ

うで聞いたコトが……。」とか頭を掻きながら申し訳なさそうに答える人が多い。なぜだろう。今「知ってる」と答えたばかりなのに。

どうも日本では「ジャズ」はカッコ良さそうなんだが、近づきにくいらしく、ある程度知識のある一部のマニアが楽しんでいる風にとられていた様子だ。そんなコトはないんですかねえ。けっこうイイかげんな音楽だと思っ

でもよく見るとジャズクラブなどは常連風の客がいて、コルトレーンがどうしたとか、ウイントンはイイとかダメとか、確かにマニアックな話をするヤツラがいるしなあ。あれには困ったモンだなあ。もつと、お気楽な音楽のハズなんだがなあ。

でもそう言いながらも皆さんはすでに何度となくジャズを聞いているのですよ。例えば

テレビのCMやドラマ、あるいはラジオやレストランから流れるジャズを。皆さんの声を正確に言えば「あまり意識して聞いたコトがない」ということなのでしょうね。フランク・シナトラや雪村いづみを知っていても「上を向いて歩こう」を口ずさめても「ジャズをあまり聞いたコトがない」なんて人が登場するのはそんな所からなのでしょう。

そうなのです。皆さんはもう何度もジャズを聞いていたのです。あるいは聞かされていたのです。そして、それを以外に心地良く楽しんでいたのでしたよ。BGMとして最高のジャズもありますからね。

僕はそんな皆さんを潜在的ジャズファンと呼んでいます。

現代社会においてジャズはすでに不可欠の音楽になっています。だいたい僕はジャズを

- ①横濱JAZZプロムナード
- ②コンベンションと野毛という町
- ③東海道という財産を持つ保土ヶ谷のまちづくり

- 1「ジャズは好き」
- 2「横浜とジャズ」
- 3「横濱JAZZプロムナードI」
- 4「横濱JAZZプロムナードII」
- 5「市民ボランティア」
- 6「祭り」
- 7「海外公演」
- 8「コンベンション」
- 9「最後に」

### うめもと實 氏

1948年、神奈川県藤沢市生まれ。逗子開成高校、桐朋学園音楽大学、新日本フィルハーモニーを経て渡独。ドイツ国立キッシーゲンオーケストラの首席トランペット奏者として活躍。1980年帰国後はJAZZライブハウス「横浜エアジン」の経営を引き継ぎ、トランペット奏者と音楽プロデューサーとしての活動に入る。サーフ90、湘南カンヌ映画祭、本牧ジャズ祭など数々のイベントの音楽プロデュースを手掛ける。1998年、NHK放送文化賞受賞。現在、トランペット奏者、横浜エアジン経営、横浜ジャズ協会常任理事、横濱JAZZプロムナード企画委員。

聞いて不快になったり病気になる人を知りません。だから皆さんも今度からこう言いませんか。

「私、実はジャズが好きだったんです」と。

## 2 横浜とジャズ

ジャズは確かにアメリカ生まれです。今世紀初頭にニュー・オリンズで誕生したといわれ、その生い立ちや育ち方はなかなか劇的です。まず最初は黒人達の歌「ブルース」とヨーロッパの「クラシック音楽」のオイシイところがミックスされたあたりから「JAZZ」として市民権を得ます。あの人種差別の中でJAZZだけは白人達も受け入れました。彼らにも理解し楽しめる要素が沢山つまっていたからでしょう。こうしてアメリカ全土へ、そしてヨーロッパへアジアへと急速に広まっています。

横浜にジャズが入って来たのは以外に早い。一九二〇年五月十二日に旧ゲート座で「BIJO JAZZ BAND」の公演が開催されてる。当時の英字新聞「ジャパンギャゼット」紙にその模様が記事にされている。

「夜会服に身を包んだ満員の聴衆たちは夜の更けるのも忘れアンコールを連呼し、大盛況の内に閉会した」と。残念なコトはこのコンサートを聞いたのは選ばれた階級の人達だったこと。そして、当然ながら米国人のバンドだったことだ。

しかし、それから五年後関東大震災の翌々年、日本人による公演が開かれた。イセザキ町にあった大衆演芸場「喜楽座」で松旭齊天

勝一座が帰朝公演を披露したのだった。この時は日本娘四人がサキソフォンを吹いたという。もともと金髪美人のダンサーが付いたというから多少怪しげなステージではあった様だ。

しかし、演奏曲目は本格的で「シャイン」やジョージ・ガーシユインが前年に書いたばかりの「サムバディ・ラブズ・ミー」などが演奏された記録に残っている。

こうして、一九二〇年代にまかれたジャズの種はこの横浜の街にゆつくりと、しかし確実に根付いていった。

全国各地に「お国自慢の歌」があるように横浜には「ジャズ」があります。「横浜にはジャズが似合う」と良く言われますが、それには訳があります。

日本で最初のジャズ演奏とか、現在三十軒以上のジャズの店があるとか、そんなコトではありません。日本ジャズ史上伝説にもなった時期があったのです。そう、戦後の一大ジャズブームの中、表舞台として「横濱」は全国のジャズミュージシャンから注目されたのです。それも唯、仕事があるからだけではなく、当時ニューヨークで流行り始めた「モダンジャズ」が演奏できる街という事で、その後の日本ジャズ界を引っ張って行くミュージシャン達が横濱にドンドン集まって来ました。彼らは口々に言いました。

「横濱は自由にジャズができるぞ」

そんな中、あの伝説の深夜のジャムセッションとして名高い「モカンボ・セッション」が繰り広げられました。ステージには、若き日の秋吉敏子、渡辺貞夫、松本英彦、植木等、

そして夭折した天才ピアニスト守安祥太郎たちがいました。これが「横濱とジャズ」を全国のミュージシャン達にハッキリと印象づけます。ミュージシャン達が創り上げた横濱のジャズ黄金時代。つい四十年前程のことです。

## 3 横濱JAZZプロムナードI

「ほんとうに出来たら凄いな」皆で企画案を練りながら僕は何度もそう思った。

とにかく、こんな「ジャズ祭」が実現したら大変なコトになるだろうな。一九九一年のことだった。この年「横濱ジャズ協会」と「横濱市文化振興財団」が同じ頃に発足した。この二つの団体が横濱JAZZプロムナードの中心的役割を受け持つことになる。

「横濱ジャズ協会」は市内のジャズクラブのオーナー、ジャズミュージシャン、ジャズ好きの市民、そして市内のジャズ祭の関係者などが集まって創る市民団体である。とは言っても別に全員がジャズを専業にしている訳ではない。それどころか、ジャズ業界の人間の方がずつと少ない。だから、まあ「ジャズを肴に一杯飲もうよ」なあって感じで集まったグループである。

もともと、メンバーに酒豪がほとんどいない為、今では「ジャズを肴に一杯食おうよ」という「メシの会」になってしまっている。協会の目的は明快だ「ジャズをもっと楽しもう」ということだ。

毎月の会報誌の発行、阪神大震災などの為のチャリティー・コンサート、テレビやラジオへの番組制作協力、ジャズクラブのPRな

写真-1 横濱JAZZプロムナード氷川丸



ど余りお金のかからないものは積極的にやっている。これは地道だが大切なことだ。

月に一度の理事会のあと、例の「メシの会」に流れるワケだが、この席でいつも素晴らしきアイディアが飛び出す。この「横濱JAZZプロムナード」もここから生まれた。

「昼間つから街中がジャズで溢れかえったらおもしろいだろうな」「横濱だもん、それ位あったっていいじゃん」「やって見ようか、何百人ものミュージシャン呼んでさあ」

「ま、ま、四の五の言わずに食べ、食べ」などと盛り上がり、何にしても一度考えて見るコトになった。

▲街全体をステージに見立てるこの都市型のアイディアは横濱の街に打ってつけた。とにかく「開港」以来の名所旧跡から近代的なホール、そして船や公園、ジャズクラブ迄、ジャズミュージシャン達が大喜びしそうな場所がこの街には山ほどあるのだから。唯、問題はそれらが本当に使えるのか。そして、本当に何百人ものミュージシャンが集まるのか。ということだった。

勝手にノミネートした会場は五十カ所余り。ミュージシャンは二百人余り。「仕掛け」はこうだ。会期は秋、十月。できれば一週間位。最低でも二三日。会場は音楽ホール、ジャズクラブ、野外ステージなどを合わせて三十会場。演奏は昼から夜まで同時多発的に行う。気楽に楽しんで貰うため料金は一日中聴き回って三千円位。出演バンドは「実力派」を中心に。アマチュア・バンドも参加させてあげる。若手グループも積極的に参加して貰う。新人の為のコンクールも開催する。ジャズに関する

資料展も併設する。アート展や写真展もやる。若いデザイナー達にステージ衣装を創って貰い、ファッション・コンクールもやってしまう。などなど、夢は膨らむばかりだった。まず、ミュージシャン達に声を掛けてみた。「やって見たくないか？」誰もがポカンと口を空けて「う、うん、やる」と、夢のような話に取り合えず相づちを打った。彼らだっただけでいいのだ。この案がウソくさくて現実的でないこと位。でもやってみたいのは彼らも同じだ。「ダメもとさあ、やって見ようよ」口裏は取れた。

そして数日間の口コミで二百人余りのミュージシャンが参加すると言ってきた。「ほんとうに出来るかも」。後は会場と資金だ。丁度バブルがコケた時期だ、スポンサー集めにはとても苦労した。と言っても僕が集めたわけではないので、苦労した様子だった。と言うべきか。

とにかく、実現に向けて本格的に企画をスタートした。大変だが楽しい仕事は我々ジャズ協会が、事務局という面倒でツライ仕事は文化振興財団が受け持つ事になった。

#### 4 横濱JAZZプロムナードⅡ

さて、いざ実行するとなると大変な仕事があるの山に見えて来た。まず、企画運営委員会を組織した。僕の担当は企画・制作。だから第一にする事は参加ミュージシャンと会場の選択だ。やりたい人には全員参加してほしい。かと言って誰でもいいというものでもない。前例のないイベントだからといってミスはし

たくない。まずプロのミュージシャンのカテゴリー分けをする事にした。

①国際的にも活躍している実力派②横濱の、あるいは横濱に縁のミュージシャン③是非、紹介したい、あるいは育ててゆきたい新人のミュージシャン達④日本のジャズ界を引っばってくれた大先輩たち。そして⑤海外のミュージシャンたち。これと別に音楽的なジャンル分けをした。ジャズの誕生から今日までの代表的なスタイルを①デクシー②スイング③モダン④ラテン、フュージョン⑤フリーなどに振り分けて見た。

当然のことながら無理は承知で、これを基本にすることにした。それと、アマチュア達だ。このグループが横濱にはたくさんある。中学生から社会人まで五十バンド以上もある。九七年からはこれらも①中学、高校生②大学生③社会人、と三つのグループに分けた。

さて、次は会場選びだ。横濱の街紹介もしたいから名所旧跡ははずせない。かといって観客の移動を考えると余り広範囲にも出来ない。可能なら二キロ四方位で納めたい。結局、開港記念会館のある関内を中心に、ゲーテ座、イギリス館、赤レンガ倉庫、水川丸、山下公園、馬車道、元町、イセザキ町通り、ランドマーク、ドックヤードガーデン、そして、関内ホール、県民ホール、市内ジャズクラブなど山手からMM地区迄がメイン会場になった。全二十七会場、二日で延べ四十六会場が選ばれた。

次に舞台スタッフの手配だ。実はこれがとても大変だった。まず、ジャズの演奏は音響機器(PA)が必要になる。この人材に手を

写真-2 横濱JAZZプロムナード ランドマークホール



抜くと演奏に大きく影響するのだ。ミュージシャン達のイメージした演奏を出来るだけ忠実に客席へ届けなくてはならない。要するにあらかじめ演奏家のブレイを知っていないと出来ない芸当になる。この人の音作りで音楽が違う物に聞こえてしまう場合さえある。だから音響のオペレーターは、もう一人の演奏家とさえいわれるのだ。会場数延べ四十六会場。ということは四十六人のオペレーターが必要になる。ジャズクラブを除いても二十人位の人材が必要だ。これは今でも苦労が続いている。次にピアノの調律師だ。一会場六バンド位の出演だが、ほとんどのバンドにはピアノが入っている。ジャズ特有の強いタッチでは二バンド位でピアノの音が狂う。ステージの合間をぬって調律をするのだが、この会場数だ。しかも多少ともジャズが判っていないと素早い調律が出来ない。これは幸いウデの良い調律師が集まってくれた。しかもジャズのことを良く知ってる連中だったので全てOKだった。そして、舞台監督、舞台スタッフ、照明家などなど。あつという間に百人を越す程のプロフェッショナルなスタッフが必要になった。しかし誰もが《街をステージに》したイベントに興味を持ってくれた。

こうして準備を進めている内に思わぬ所へ波紋が広がっていた。東京のライブハウスだ。彼らが僕に言ってきた。「その間、オレ達の店の出演者はどうなるんだ」そりゃそうだ。ほとんどのジャズミュージシャンを横浜へ大集合させる訳だから東京は空になってしまう。イメージを東京の店も会場の内と思いい、何軒かの店のブッキングも手伝った。いやいや大

変なコトになって来た。しかし、おもしろい。日本のジャズ界が久し振りに騒ぎ出したのだ。目標観客動員数は一万人。結局この数字は簡単にくつがえされた。終わって見れば二万九千人という大観衆であった。そして、この秋、第六回が開催された。関連イベントを入れて九日間だ。順調に育って来たこの催しは、遂に出演者は千人を越えた。会場数は延べ六十三会場。観客は六万人。七十二社だったスポンサーも百三十五社にまでなった。目玉の一つ、新人の為のジャズ・コンペティションもグランプリ受賞者は全国を舞台に活躍している。そして、今年からは写真コンペティション部門もふえた。展示は「横浜のジャズ祭」から「世界のジャズ祭」まで貴重な写真、雑誌、ポスター迄、皆さんに見て頂いた。こうして、「もし出来たら」という思いをミュージシャンと供に実現した。

## 5 一市民ボランティア

このジャズ祭には市民ボランティアという一般の方が毎年百五十人位参加してくれる。文化振興財団が呼びかけてくれるのだが。ここ数年、ボランティアと称する人に三つのタイプがいることに気がついた。一つは専門職をおしみにく出してくれる人たちだ。そして、次は専門職ではないが、積極的に手伝ってくれる人達。そして、これが一番手強いのだが、レクリエーションをかねて参加している人だ。この手の人達は当日、

電話一本で休んでしまおう。「今日、都合で行けなくなりました。」これでおしまいだ。あるいは「全然、ステージが見れませんでした」又は「これじゃ、タダ働きと一緒だ」など。そもそも欧米の様に教会と共にボランティア活動が育っていない日本としては、やむを得ない点も多かるうと思うが、ま、仕方ないか。皆が参加してくれる事の方が大切かも知れない。今のところは。

## 6 一祭り

次に、この横浜JAZZプロムナードが何故この様な成功を収めているか少し考えたい。いろいろあると思われるがそのいくつかを記しておく。

まずはミュージシャン達の参加意欲だ。これなくしては今後の成功もありえない。では何故、彼らはそんなに積極的なのだろうか。それは「横浜のジャズ伝説」だけではないはずだ。純粋に自分達の自由な演奏の出来る「場」を求めているのだ。名声や曲目で聴かれるのではなく、自由な演奏を自由に楽しんでくれる人達の前でやって見たいのだ。

このジャズ祭、実は非常にミュージシャン寄りに企画されている。会場の希望から演奏曲目まで彼らの意見を最大限に取り入れている。僕がこうしてほしいなどと言うことはほとんどない。全て彼らが自主的にステージをこなしている。せいぜい「一時間半で終わって下さい」と言う位だ。これが自由か野放しかは分かりませんが、結果を見る限りうまく行っていると思う。

写真-3 横浜JAZZプロムナード



そして、スタッフだ。このスタッフの人材がとて良い。能力的に問題のあるヤツもいるが、それでも皆「人柄」が良い。このジャズ祭は興業ではないので、これが凄く貴重なことなのだ。皆で協力すれば何とかなるといふ見本の様だ。

これらがミュージシャン達に伝わった時、とても人間味溢れるイベントになっていく。とても暖かでエキサイティングなステージばかりだ。と言われるのもきつとスタッフの良さからだと思われる。

そして、何よりもミュージシャンがうれしいのは「横浜市文化振興財団」の参加だ。これは彼らにとって非常に心をくすぐられていく。公的機関だからだ。クラシックならともかく、多くのジャズ演奏家達にとって、「認めさせた」といった思いがあるのかも知れない。要するに「横浜市」というものが良いイメージを彼らに与えているのだ。横浜の「ジャズ伝説」は生きているのかも知れない。しかも、企画や運営は仲間のプロ集団がやっているので、「最高だね」と言うのも分かる気がする。このミュージシャン達の「やる気」が成功の最大のポイントだろう。

とはいっても、それだけであの大観衆が全国各地から来るとも思えない。彼らはこのイベントに違うモノを見てるのだ。「ジャズ祭」から「祭り」を見て取ったのだ。いくら「街中をステージに」しようと、「千人のミュージシャンが」登場しようと「ジャズ」だけでは数万人の観衆を集めるのは至難のワザだ。

彼らは「祭り」を見に来たのだ。それなら分かる。どの国でも「祭り」となるとワクワク

するもんだし、ついつい見物したくなるものだ。だから、僕は、万燈御興や江戸御興をかつぐように、二百もの「ジャズ御興」をかついでいるのだ。肩がこるワケです。

## 7 海外公演

第一回目から海外のミュージシャンや海外のジャズ祭との交流をしている。九七年夏はニューヨークJAZZ祭の協力のもと、横浜JAZZプロムナード・NY公演を成功させた。九八年十一月はパリ公演も無事終了して来た。ジャズは海外からの贈り物です。そして今、この横浜で大きく花開こうとしています。

僕らは日本のミュージシャンを出来るだけ海外にも紹介し、そこから新たな文化を横浜へ持ち帰ってほしいと思っています。この交流から九八年のプロムナードでは、アメリカ、フランス、オランダ、ドイツ、オーストリア、スイス、デンマーク、ロシアの各国から世界最高水準の音楽家たちが参加してくれました。

「横浜JAZZ PROMENADE」の名称には夢が込められています。「横浜」は日本語、JAZZは英語、そしてPROMENADEは仏語です。いつかこの「祭り」が国際的な催しになる事を祈ってネーミングしました。

## 8 コンペティション

このイベントは三つの要素から成り立っている。①ライブ②展示③コンペティションの

ことも記しておきたい。これは新人の為のジャズ・コンクールで、テープ審査を経て本選はジャズ・プロムナードの一環として公開演奏を行うというものです。プロを目ざす人たちの為ということもあり、毎年、全国から二十組位の応募がある。審査員はプロのミュージシャン、ライブハウスのオーナー、レコード会社、放送局、そして、横浜市民百人がこれにあたる。グランプリを取ったグループにはCD作成、翌年のプロムナード出演、横浜や東京のライブハウス出演、全国のジャズ祭への出演など一年間に渡ってサポートする、というものだ。コンクールはそれがゴールではなくスタートなのだ。そして、この中から五年後、十年後にはプロムナードの中心的ミュージシャンとして登場して貰いたいと願っています。

## 9 最後に

全国的に見ても世界的に見ても横浜の街は「ジャズが良く似合う」と思います。そして、何よりもジャズ演奏家達の熱い視線がこの街に注がれているのが僕にも良く感じられます。ジャズという音楽はその国、その土地で見事に同化してゆきます。今、日本のジャズが新たに誕生しようとしています。横浜はそれを育て発信していく権利をこのジャズ祭で得たかも知れません。

これから僕は全国の、そして世界のジャズ祭との交流を今以上に深めようと思っています。横浜市もどうか暖かい目でご協力下さい。